

第四 戻駕色相肩 廓話の段

〈出典：「四ツ橋文楽座参月筋書」、昭和29年3月〉

解説

祭礼や年中行事、市井の雑芸人の姿態はもとより、諸々の物売りや、浮世風俗の千姿万態は傾城、禿のなりふりから、座頭、丁稚、子守、手習子の一挙一動までが、即興的に舞踊化され、所作事として江戸の舞台に取り入れられた。この「戻駕」もそうした駕籠舁きを舞踊化した風俗所作の一つとも見られるもので、歌舞伎には古くからあったが天明八年十一月江戸中村座の顔見世狂言「唐相撲花江戸方」の大切に所作事として上場されたのが当って、駕籠舁きの踊はこれに止めが刺された。作詞初世桜田治助による常磐津である。これがやがて人形芝居に入って義太夫による所作事として今日舞台に上るようになったものである。

梗概

桜に霞む朱雀野を遙かに見渡した京都の紫野のあたり。吾妻の与四郎（真柴久吉）と浪花の次郎作（石川五右衛門）と呼ばれた相棒が四手駕を下して一寸一服、お互いにお国自慢から廓話になり、駕の客なる島原の傾城小車太夫の禿たよりを呼び出すと、谷の戸開けて鶯のまだ廓馴れぬ風情で禿が駕から現われる。そして禿が島原の話、次郎作が上方の遊び、与四郎が吉原の小見世情調をと、三人がそれぞれに廓嘶に花を咲かすと言う理屈抜きの明るい一幕である。